

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。



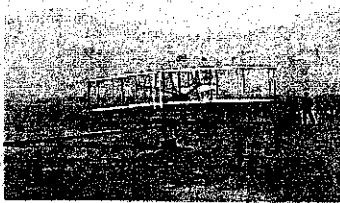
九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース **No. 8 4**
2008(平成20)年12月17日(水)発行

ポイント

<105年前の1903(明治36)年12月17日、アメリカのライト兄弟、空を飛ぶ夢実現の日>

◆この日、アメリカの東岸ノースカロライナ州キティホークには寒い風が吹いていた。10時ごろ、粗末な木製布ばりの複葉機のエンジンがうなり、プロペラがまわりはじめ、2本の木の上をすべりだした。操縦しているのはライト兄弟の弟のオーヴィル。機体は3mの高さで、約36m飛び、12秒間滞空した◆さらに飛行は3回つづけられたが、兄ウィルバーが乗った4回目は約260m・59秒飛ぶことができた。人類史上記念すべきこの光景を見ていたのは、兄妹をいれて5人で、今から105年前のこと。◆2年後、38分、45キロメートルの飛行に成功し、ようやく新聞報道された。それ以後初めて第一次世界大戦に利用され、皮肉にも戦争とともに大きな進歩を遂げる。



大槻明生さん撮影 現在の原町飛行場跡



原町飛行場にこだわり
私は昭和九年二月、原町生まれです。子どもの頃から原町にあった飛行場にこだわりがあり、今でも写真を撮ったり調査したりしています。
(裏面につづく)



原町の戦跡の語り部として

原町区国見町 大槻明生

【写真説明】

- ① 原町飛行場正門
- ② 雲雀原神社の石柱、右手が社
- ③ グラマン機の銃弾跡が残る石柱
- ④ 雲雀原神社社殿
- ⑤ 墓標のように昔の面影を残す第四飛行機格納庫の礎石
- ⑥ 第三格納庫の基礎コンクリート
- ⑦ 第一格納庫の基礎コンクリート

小学校でも作業を行う

昭和十六年十一月八日の日米開戦のことは、まだ小学生で記憶は残っていません。でも戦時中は小学校も授業と奉仕作業が半々で、イナゴ取り、桑の木の皮むき、茅萱（ちがや）取りなどを行いました。

六年生の頃、原町飛行場に行き、その一角に縄を張り、草地のところを掘り返し土を出して畑に見せかけ、一種のカモフラージュの作業も行いました。空襲に備えたのでしようが本当に幼稚なことですね。

爆弾投下 防空壕の中で

「ダメかな」と思った

私にも空襲の体験があります。昭和二十年の八月、アメリカのグラマン機が海の方から六・七機で飛んできて無線塔を旋回し、操縦しているアメリカ兵の表情が分かるほどの低空で町に突入してきました。その頃の原町の町並みはせいぜい二階建てでしたから、ずっと無線塔も原紡（原町紡織工場）も見通せました。

終戦間近の八月九日か、十日だったと思います。私の実家は原町区の中央通りで駅にも近く、空襲警報で家の庭の防空壕に入っていました。ところがその頃あった石川製糸工場（今でも三階建ての建物が残っています）のトロッキ線路のカーブのところは三十キロ爆弾が投下され、私は防空壕の中でボンと浮いたよう

になりました。もうその時は「ダメかな」と思ったほどの大きなショックでした。

鉄片が家の壁を突き破る

同時に原町駅の機関区、駅の東にあった帝金（帝国金属工場）、原町小学校（現・原一小）、そして一番ひどかったのが原紡への攻撃でした。原紡は小松先生など三名が機銃掃射で死んだり、七日間位燃え続けていたことを覚えています。

駅の機関区への爆撃では死者も出ましたし、五十センチほどの鉄の破片が私の家まで飛んできて台所の壁を突き破っていて、子ども心に大変恐怖を感じました。

戦跡めぐりの案内をして

私は今年依頼があつて、郡山・福島、保原の「九条の会」の皆さんの原町戦跡めぐりの案内をしました。飛行場跡のガイドをしなから「戦争はぜつたい一度とやるべきではない。十九や二十歳の若者を戦死させるなど、皆さんの子どもだったらどうですか」と話しています。

田母神航空毒僚長の発言は、自衛隊のトップとして大変問題で、戦争体験がないので戦争の実態や悲惨さが分からないでしょう。平気であることを言っているけど、戦争を経験した私たちには信じられない発言です。（「はらまち九条の会」会員・十二月十日談、文責事務局）

○大槻さんは現在お仕事を退職され、南相馬市原町区芸術文化協会理事幹事、日本報道写真連盟原町支部支部長、南相馬市博物館内 市史編さん係 調査協力委員、福島民報特別通信員ふるさと記者、などを兼任されています。

「九条の会」設立呼びかけ人 加藤周一氏 12月5日 死去（89歳）

◆ 西欧的な知性と教養を備えた文学者
◆ 世界文化の中で日本文化の特質を考察

4年前の2004年6月、「九条の会」が設立されました。呼びかけ人は、井上ひさし（劇作家）・梅原猛（哲学者）・大江健三郎（作家）・奥平康弘（憲法研究者）・小田実（作家）・加藤周一（評論家）・澤地久枝（作家）・鶴見俊輔（哲学者）・三木睦子（三木武夫記念館館長）の9名でした。小田実が昨年7月30日に死去、またこの12月5日には加藤周一が亡くなりました。加藤氏がどんな人だったのか、見てみましょう。東京書籍発行『新総合図説国語』より▼



文学的出発

開業医を父とし、学生時代から内外の文学に親しんだ。一高から東京帝大文学部に進むが、仏文科の講義に出たり、中村真一郎、福永武彦らと詩の集まりをもつたりした。卒業して医師となったが、敗戦後にこの二人と共著でエッセー集『文学的考察』（昭22）、及び定型詩集『マチネ・ポエティック詩集』（昭23）を刊行。その西欧近代を規範とした批評と創作が、旧弊な日本への清新な批判として注目された。

小説と評論

のち雑誌『近代文学』同人となり、小説では戦争体験に取材した『ある晴れた日に』（昭24）、芸術家小説『運命』（昭31）、炭坑労働者の争議を描いた『神幸祭』（昭33）、舞台を世界に広げた連作『幻想 薔薇 都市』（昭48）など、多彩な試みを示した。また昭和30（二〇五年）年に、三年半に及ぶフランス留学から帰国して以後、日本文化の特質を世界の文化の中で相対化して考察するという評論活動が本格化した。「日本文化の雑種性」（昭30）に始まるその最初の成果は『雑種文化』にまとめられた。

国際的な視野

昭和33（二〇五〇）年にアジア・アフリカ作家会議に参加し、またカナダやドイツの大学教授を長く務めるなど、国際的な文学者として活動する一方、評論集『称心独語』（昭47）で日本の伝統美術を論じ、さらに『日本文学史序説』を著した。また自伝的な『羊の歌』（昭43）や文明批評的な『夕陽妄語』（昭59）などのエッセーも広く読まれている。

<手頃な加藤氏の著作> ○加藤周一『憲法は押しつけられたか』かもがわブックレット ¥571+税
○京都教職員組合・京都教育センター編『加藤周一、高校生と語る』かもがわブックレット ¥571+税
○『憲法九条、あしたを変える・小田実の志を受けついで』岩波ブックレット ¥480+税